

特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会

災害復興委員会

2023年度 活動報告書

【特集1】

災害復興に活かす「ファシリテーションと
板書・見える化」講座 ————— 2
～静岡県内の災害支援にかかわる
多様な立場の参加者が集いました！

【特集2】

災害ケースマネジメントとファシリテーションを考える ——— 6

秋田の県域での情報共有会議を支援 ————— 8
～令和5年7月豪雨・秋田まるっと会議

災害が起こる前の計画づくりと
ファシリテーションの可能性を考える ————— 9
～「事前復興まちづくり計画」の勉強会を開催

東日本大震災、福島県沿岸部視察 ————— 10
～自分たちにとっての災害・復興支援の
原点を見つめ直す

[令和6年能登半島地震] ————— 11
・能登半島地震で被災したこどもの居場所づくり
関係者連携会議（オンライン支援）
・七尾市情報共有会議「いやさか会議」

2023年度活動一覧 ————— 12

[特集1]

災害復興に活かす「ファシリテーションと板書・見える化」講座 ～静岡県内の災害支援にかかわる多様な立場の参加者が集いました!



毎年のように各地で頻発している災害では、被災地及び被災者の課題を解決するために多様なセクターが連携・協働してさまざまな話し合いの場がつけられます。FAJ（日本ファシリテーション協会、以下同）として数多く関わってきた現場でも、支援者に求められるのは「話し合う力」ファシリテーションスキルでした。このことから、今回は、「板書・見える化」のスキルに着目して、実践を交えた体験型で学ぶ講座を行いました。

「板書・見える化」とはホワイトボードや模造紙などに話し合いの参加者の発言を同時進行で書いていくことを指し、ファシリテーションの重要な基本スキルのひとつです。

板書すれば話し合いが文字で“見える”ようになり、それによってテーマに集中しやすくなり、発言が促され、情報共有が正確にできるようになって、さらにはさまざまな意見をまとめやすくなるなどの効果が期待できます。災害復興の現

場における話し合いには多様な人たちが多様な情報や”思い”を持って参加しているため、この「板書・見える化」は特に活用したいスキルです。

これまでFAJでは被災地外から支援に入る団体として復興支援に特有の「板書・見える化」の知見を蓄積してきました。その蓄積を活かし、今回はそんな復興支援で活用できる「板書・見える化」に焦点を当てて、講座を開催しました。

〈講座概要〉

◎講座日時

2023年9月9日(土)

13:00～16:30

※プレ講座(オンライン)

2023年9月1日(金)または

9月4日(月) 19:30～21:00

◎対象

- ・静岡県内の行政・社会福祉協議会・NPO・災害ボランティア団体等の方
- ・静岡県内で災害支援に関わっている方、もしくは今後関わる予定のある方
- ・静岡県外で災害支援に関わっている方

◎参加費 無料

◎参加者 30名

(定員30名申込み31名当日欠席1名)

◎構成 レクチャーと演習

〈参加された方の声〉

- ・細かな書き方や留意点が知れたこと
- ・日頃の練習が大切ということでした
- ・実際に読み上げられた情報を紙に板書することが印象に残りました。紙に書いてみると記入が遅れたり、必要なことが漏れることもあったので、今後機会があれば積極的に板書を行いたいと思いました
- ・2人組で板書をするとうれいできる
- ・聞きながら、まとめ、無理せず、要点を確かに記入する事が大事でした
- ・字が下手でもわかりやすい板書の方法もある
- ・促進する方法で見える化が不可欠だということが印象に残りました
- ・実践を通じて「囲み」や「塊を枠で囲む」ことで、ぐっと見やすくなるのが、分かったこと
- ・板書は記録以上に戦略効果があると思いました
- ・見せ方の工夫次第で、会議の進行にも寄与できると、納得できた
- ・災害の実践的な内容で、板書の練習が繰り返してきたこと



講座当日の様子。小グループに分かれて全員が交代でホワイトボードに板書をした。

復興支援の現場で役に立つ実践的な内容で ～講師からの講座の意図解説

加藤 彰

NPO 法人日本ファシリテーション協会フェロー



本講座のキックオフミーティング。関係者の皆さんから言われたのは「加藤さん、イラストを描いたりしてその場を楽しくしちゃいけないの、災害がまさに起こっている現場なんだから。それと、とても多くの情報が飛び交って、それを皆で共有することが一番大事な場なの」でした。

そこで今回プログラムを構成する上で以下を重視しました。

まず情報を文字に写し取る練習の反復です。うまく文字に落とせないと、つい脳も手も止まってしまって、出てきた意見を拾わずにやり過ごしてしまうことはありませんか？ まずはひるまないようにならねばなりません。自己紹介を文字にするところから始まり、次に話し合いの場に出てくる意見を模造紙に書く、さらには付箋に書く、と何度も文字に落とす練習を取り入れました。

次に、情報を平等に拾うスタンスです。出てきた意見は、その時点では大切な情報なのかどうか判別できず、あとになって重要だったと判ることもあります。となると、大事な情報を失わないためには、予断を入れずにどんどん拾っていく心意気と持続力が要ります。

3番目は読みやすい文字です。誰も字の癖はありますし、特に字のあまり上手でない人が「上手な字」を書くのは難しいものです。ですが、下手でもそこそこ読めるように書く、一定の原則が存在します。それを伝授しました。

4番目は(上記3つができたという前提のもとですが)、類似の情報が的確に分類された状態で見ると人の目に飛び込んでくるようにする構造化です。情報の塊が認識できるような文字の配置の仕方や枠囲みの使い方が鍵になります。

最後は、二人がかりでの記録です。一人がホワイトボード/模造紙、もう一人が付箋を受け持ち、細かい個別情報をなるべく付箋担当者が書き留めて貼っていく。分担協力することで、互いの余裕も生まれ、情報の抜け落ちが大いに減ります。

さて残るは、短い講座の時間でどうやって練習の回数を担保するかです。ここは、企画チームが災害復興の現場で起こる典型的な話し合いの台本を用意し、当日は台本を読む形にしました。こうすれば演習のたびに参加者全員がトレーニングできます。しかも参加者同士の“作品”を見比べることで、同じ内容でも人によって書き留め方に差があることを知り、見やすい板書の特徴は何かを考えてもらうことができました。

皆さんの熱意溢れる参加姿勢が印象的でした。回を重ねるにつれ腕前がどんどん上がっていく人も少なくありませんでした。非常に充実した時間をご一緒させていただけたと感謝しています。



グループで互いの板書を見せ合いフィードバックをしている様子。



自分で書いてみたものを分かち合っている様子。

講座その後の取り組み ～熱海市伊豆山ささえ逢いセンター相談員連絡会での実践

ファシリテーションがスキルアップするには「場数」と「振り返り」が必要です。また、それも、勉強会ではなく本番で実践するとなると、やはり心構えが違ってきます。そこで講座生に、FAJが毎月会議の進行と板書を担当している熱海市伊豆山土石流災害の会議での板書にチャレンジしてもらいました。

実践に当たっては、まさに本番なので主催者や参加者に迷惑がかからないようサポートする体制をつくりました。

【実践までの流れ】

1. 熱海市伊豆山ささえ逢いセンター（以下、ささえ逢いセンター）に、講座の受講生の実践の場として会議に参加させたいことを趣旨と共に説明し、実践してもらう受講生の人選や当日の進め方なども打ち合わせをしました。
2. 板書担当のサポーター（※）2名が、会議をスムーズに進めながらも受講生にとって学びになるように事前準備、本番などの役割分担を決めてくれました。

3. 当日の進め方

- ①. 事前準備：サポーターが事前に書いておくものを受講生に書いてもらうなど実践を意識して役割を渡しました。
- ②. 本番：連絡会は前半 10 時から 11 時 30 分までは、静岡市職員、静岡市社会福祉協議会職員、ささえ逢いセンター長、副センター長などで話し合い、後半 11 時 30 分から 12 時までは、相談員のみでの話し合いという 2 部制になっていました。そこで、前半の板書は、サポーター 2 名で書くことで見本を示して、後半は受講生が実践しました。サポーターは取りこぼしが無いか補助をしながら進めていきました。
- ③. 会議終了後：連絡会終了後は、FAJ 内で振り返りをして、気づいたこと、学んだことを確認しました。

（FAJ 災害復興委員会、鈴木まり子）

※サポーター：これまでファシリテーションによる被災地復興支援の経験を有する FAJ 会員

講座の体験があったから、 本番では思い切って板書をする事ができた

小澤 裕美

静岡県社会福祉協議会



アートだと思いました。ただの文字起こしではないぞ。災害復興に活かす「ファシリテーションと板書・見える化」講座を受講した後、熱海市伊豆山ささえ逢いセンターが主催する住民懇談会で、板書を担当しました。

発災後から2年以上が経過。参加者の皆様の今置かれている状況は、個々で異なりました。様々な思いで、懇談会に御参加いただいた皆様の一人ひとりの貴重な御意見を聞き漏らさず、かつ、わかりやすく表現するためにはどうしたらよいか。

「記載方法は話をする順番に記載するだけじゃないぞ」「今回のお題は?」「参加者はどんな方か、懇談会の意図は何か」

研修で学んだことを思い出しながら会議が始まる前に事前のリサーチも欠かさず行いました。講座で実際に板書を体験し、字を書き、イラストを描き、参加者同士で意見を出し合いました。この経験があったので、本番では思いきって板書をする事ができました。また、出てきた意見をまとめることも頭を回転させる良い機会です。半面、自分の見識の無さにつかり。前に立ち板書するメリットとして、「?」と思ったことは書きながら参加者に質問することもできました。

見える化は、会議まわしの中でも大切と実感。板書があると、今何が論点か、今話していることは何かが明確になります。また、参加者も発言しやすくなります。メリットだらけ！これぞファシリテーション！私は、ホワイトボードに描くのが好みですが、これからはWeb会議でのホワイトボードを活用したり、イラストの種類を増やし、表情を豊かに描けるようになりたいですね。

書くことで人の思いを繋いであげられる板書を 目ざし、学びを深めたい

赤澤 佳子

FujiことはじめSASAERU代表



被災者支援コーディネーター研修を受講中、令和5年12月20日(水)板書見学とお手伝いをさせて頂ける機会を頂く。(会議名は熱海市伊豆山ささえ逢いセンター相談員連絡会の会議。FAJ災害復興委員会が進行、板書を行う会議)

議題は令和6年1月14日実際に熱海土石流災害を受けた地域に住む住民皆さんが集まる交流イベントの打ち合わせ。

まず会議の進行を共有、会場に合った会議スタイルを考えた。今回は椅子を利用した円陣スタイルに。板書用のホワイトボードだけでは足りず急遽壁に紙やライティングシートを貼る。会場に筆記用具が揃っているとは限

らない事、マイペンを持参しておく事などを教わった。勉強になったのがイベントの打ち合わせの場合はあらかじめわかっている範囲内でのタイムスケジュールや持ち物リスト表は書いておくこと。時系列も大切。案の定今回の会議は大人数での会議。慣れた仲間内での会議だったため内容の決定もスピードがある会議だった。板書が2名という意味が分かった。しっかりファシリの方が確認事項を復唱し『ここは書いて!』と目で合図していた姿も印象的だった。最後FAJ振り返りの時間がありみんなで司会進行、板書の漏れは無いかのチェックをした。特に今回は被災された方々に寄り添ったイベントにしたいという、センターの想いがひしひしと伝わってくる打ち合わせだった。仕上がったホワイトボードにはしっかり大切にしたい職員皆さんの“想い”には吹き出しとラインマーカーが引いてあった。私も関わる全ての人をしっかりと受け止め、書く事で人の思いを繋いであげられる板書(活動者)を目指し、学びを深めていきたい。

講座後に石川県珠洲市の活動で板書を担当、 学んだこと、経験したことを活かすことが出来た

鈴木 幸子

常葉大学社会環境学部



私は、大学3年生になってから、月に一回行われる災害復興支援ボランティアチームによる「しずおか茶の国会議」に参加しています。その過程で、板書を担当する場面がありました。しかし、今まで板書の経験がなく不安があったため、しっかり学ぼうと思い、9月9日に行われた講座に参加することを決意しました。講座では、2人1組となって板書をするという実践の時間がありました。ここでは、自身の板書を上手に出来ない理由として、思い浮かばない漢字や書く場所の構成などを毎回考え込んでしまうことであると気付かされました。

講座を受けて以来、何事も経験を重ねることが大切であると思い、今に至るまで板書を担当させていただきました。さらに、私は1月1日に起きた能登半島地震の被災地である珠洲市で3月22日から3月24日の間、アウトリーチをさせていただく機会がありました。活動の後、毎回振り返りをする場面があり、私はそこでも板書を担当させていただきました。講座で学んだこと、そして今までの経験を重ねてきたことにより、書くべき要点を瞬時に導き出し、思い浮かばない漢字は思い出すことに時間をかけず、カタカナやひらがなで書くというようなとっさの判断が出来ようになっていたことを実感しました。さらに、板書をする事で、内容が以前と比べて、頭に入るようになりました。経験を重ねることの大切さを身をもって感じる事が出来たと思います。これからも、経験を重ねていき、立派な社会人になることが出来るように技術を磨いていきたいと思っています。

[特集2] 災害ケースマネジメントとファシリテーションを考える

災害被災地での復興のプロセスにおいて、近年では“災害ケースマネジメント”と呼ばれるアプローチが注目されています。災害復興委員会では、静岡市において災害ケースマネジメントの実際のケース会議をファシリテーターとして支援し、2023年12月に開催されたJVOAD全国フォーラムにおいて「災害ケースマネジメントにおけるファシリテーションの活用」と題して事例を紹介しました。

JVOAD（認定NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）主催の第7回「災害時の連携を考える全国フォーラム」が2023年12月12～13日、東京両国KFC Hall & Roomsで開催され、災害復興委員会は分科会「災害ケースマネジメントにおけるファシリテーションの活用」というテーマで分科会に出展しました。災害ケースマネジメントは、被災者一人ひとりに必要な支援を行うために、訪問等のアウトリーチにより被災者の状況を把握し、官民連携の下、多様

な課題に対応することで被災者の主体的な自立・生活再建のプロセスを支援する被災者支援の手法です。災害ケースマネジメントにおけるケース会議および情報連携会議を円滑に進めるために、ファシリテーションスキルがどのように活かせるのか、実際のケース会議を題材に活用のコツを伝えるとともに、災害ケースマネジメントの課題について、パネリストや参加者とともに考える時間を持つことができました。

（FAJ災害復興委員会、山田真司）

JVOAD 全国フォーラム 分科会
日本ファシリテーション協会 パネルディスカッション
「災害ケースマネジメントにおけるファシリテーションの活用」

●日時：2023年12月13日（水）13:00-14:30

●会場：KFC Hall & Rooms（東京都墨田区）

●パネリスト：

新井 大地 内閣府 政策統括官（防災担当）付 参事官（避難生活担当）付参事官補佐

永野 海 弁護士・防災士日本弁護士連合会 災害復興支援委員会副委員長 / 静岡市教育委員会 学校防災アドバイザー

大澤 佑介 社会福祉法人 静岡市社会福祉協議会 静岡市地域支え合いセンター長

鈴木 まり子 日本ファシリテーション協会災害復興委員会・フェロー



当日は約50名の方々にご参加いただき、会場は満席に。

「静岡市災害ケースマネジメント会議」に板書担当として参加して ～サポーター FAJ会員の感想から

尾上 昌毅

2023年11月に静岡市で「静岡市災害ケースマネジメント会議」が開催され、令和4年台風15号で被災された方をケースに、支援方法や解決策が官民の多様な関係者で話し合われました。医療・福祉の現場などでケース会議を目的にはありましたが、災害の被災者に対するものは自身初めての経験でした。被災当事者にかかわる関係者が、なかば当日初顔合わせで行われる話し合いでした。今回、板書支援の経験から感じたことは、当日の会議開始までの事前準備の大切さです。座席や机をどう配置するのかという場づく

りに加え、検討の助けになるケース情報（発災から今日にいたる経過の時系列での表示、ご家族などの関係者の図示など）をあらかじめ書いて準備しておき、その場で追加的に出てきた情報をそこに書き加えるやりかた、ケースマネジメント会議にふさわしいチェックインのお題、グラウンドルールの設定など、2時間の会議の準備のなかに多くの工夫が組み込まれていたように思います。今後はこうした会議が、災害被災者の個別の困りごとを解決する手段としてもっと広がり、そこにファシリテーションがしっかり活かされていくことを期待したいです。

複合化、複雑化した被災者の課題に対応するために

大澤 佑介



静岡市地域支え合いセンターは、令和4年台風15号で被災された方々の見守り、生活再建の支援を行っています。災害発生から1年以上が経ち、多くの被災者に日常が戻る一方で、今なお元の生活に戻れていない方もいます。そうした方々が抱える課題は、どれも複合化、複雑化しており、支え合いセンターだけで解決することは困難と言えます。より良い支援を進めるためには、弁護士、建築士、ボランティア、NPO、自治会、民生委員、地域包括支援センター、行政等の

多様な主体との協働が不可欠です。

FAJの皆様にご協力いただき開催したケース会議では、事前準備から会議作り、進行、記録等において、協働を促進するための様々な仕掛けがありました。支え合いセンターが、これからも被災者に寄り添った支援を進めるためには、被災者に寄り添う心、支援制度の知識、多様な主体とのネットワークに加え、協働を促進するためのスキルが重要になると改めて感じました。

災害ケースマネジメントとは何か

今後の災害ケースマネジメントの展望などについて

新井 大地



災害ケースマネジメントは、被災者一人ひとりの被災状況や生活状況の課題等を個別の相談等により把握し、必要に応じ専門的な能力をもつ関係者と連携しながら、課題等の解消に向けて継続的に支援することにより、被災者の自立・生活再建が進むようマネジメントする取組です。

災害ケースマネジメントを進めるに当たっては、行政や福祉関係者、士業団体、NPO等の民間団体等、官民の関係者が連携し、それぞれの専門知識を活かして支援方を

検討することが必要ですが、円滑に議論をまとめていく上では、ファシリテーションが大きな役割を果たします。平時から関係者間で顔の見える関係を構築するとともに、それぞれがファシリテーションについて理解を深めておくことが重要と考えます。

内閣府では、令和6年度は、都道府県単位での説明会やモデル事業の実施を予定しており、引き続き、災害ケースマネジメントの普及・定着を図ってまいります。

災害ケースマネジメントの理想と課題

永野 海



災害ケースマネジメントには、〈理念〉と〈手段〉の2つの側面がある。理念としては、被災者に一律の支援パッケージを提供するのではなく、一人ひとりの被災状況や直面する問題が異なることを前提として、その人、その世帯に適したオーダーメイドの支援を継続的に実施しようとするところに重点がある。そのため、戸別訪問、アセスメントの実施、個別的な支援情報の提供、ケース会議による議論、支援団体との連携など様々な手段がある。

災害ケースマネジメントの実施には相当な人員が必要に

なるし、被災者支援の専門的知見も欠かせない。大規模災害では高齢者、障害者など多数の災害弱者への支援が必要となるが、現状、継続的に災害ケースマネジメントを実施できる人的資源が十分に確保されているとは到底言えない。災害ケースマネジメントが基本的な被災者支援の理念、手法として定着するかは今後の国と行政の本気度に左右される。また、限られた人員で多数の被災者のケースを扱うには、ケース会議等における効率的、効果的な議論を主導するファシリテーションのスキルも重要となるだろう。



秋田の県域での情報共有会議を支援 ～令和5年7月豪雨・秋田まるっと会議

「令和5年7月豪雨」(※1)で甚大な被害を受けた秋田県。FAJでは、秋田でNPO支援等に取り組むNPO法人あきたパートナーシップが主催する「令和5年7月豪雨被害秋田県域情報共有会議」(愛称：秋田まるっと会議)を8月11日と31日の2日間、支援団体(※2)と共にサポートしました。この会議の開催によって、支援団体や機関、行政、社会福祉協議会が集い情報を共有し課題解決につなげることができました。

FAJは、情報共有会議での全体ファシリテーターやミーティングでの板書、プロセスサポートなどで支援。その後、

主催団体では秋田市域での情報共有会議を毎月1-2回定期開催し、NPO、市役所、社会福祉協議会などが情報や課題を持ち寄りながら被災者の課題解決の支援を続けています。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

※1：秋田県内の被害：死者1名、全壊11、半壊2892、床上浸水741、床下浸水3367、非住家被害795。(秋田県災害対策本部42報より)

※2：NPO法人あきたパートナーシップ、NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク、いわてNPO災害支援ネットワーク、NPO法人いわて連携復興センター、災害支援ネットワークおかやま、NPO法人岡山NPOセンター、NPO法人日本ファシリテーション協会など

会議がきっかけに
地元団体との連携が進んだ
NPO法人あきたパートナーシップ
理事長 畠山さん

被災後の大変な中でしたが、1回目の情報共有会議を開催することで関係機関や団体が一体になれた！という感じがしました。また、会場やハイブリッドでオンライン参加してくれた遠方の国や企業やNPOなどの皆さんの秋田への心配や支援をしたいという気持ちをひしひしと感ずることができました。あの場をきっかけに地元団体とも連携が進みました。今後は、出水期である7月の前の時期に、県内の支援団体や関係機関が集い情報共有できる場が作れたらいいなと考えています。



8/11 第1回目の情報共有会議(ハイブリッド)



8/31 第2回目の情報共有会議(ハイブリッド)



情報共有会議の前に支援団体同士で打合せ

Topic

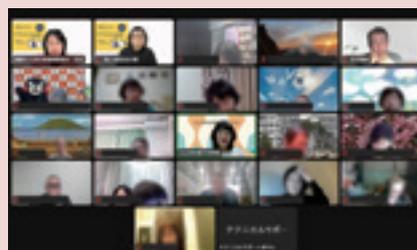
「防災復興トークカフェ online」を開催

災害復興委員会では、防災や災害復興について最前線で活動しているFAJ会員の方にざっくばらんにお話を聴き、交流するトークカフェを開催しました。2/21は、防災・被災地支援と男女共同参画の活動をしている小山内世喜子さん(一社)男女共同参画地域みらいねっと 代表理事)がゲスト。3/26は子どもや市民への防災教育&

被災地支援の活動を実践している上田啓瑚さん(一社)BOSAI Edulab代表理事、筑波大学大学院博士課程在学中)がゲスト。活動の話聞いた後はゲストからのお題についてアイデアを出し合い意見交換しました。今後も多様なテーマの実践者のお話を聞く機会を作っていきます。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)



当日お話をされている小山内さん(左)と上田さん(右)





災害が起こる前の計画づくりとファシリテーションの可能性を考える

～「事前復興まちづくり計画」の勉強会を開催

災害が起こる前から自治体ができることとして「事前復興まちづくり計画づくり」があります。現在、南海トラフ地震の被災想定自治体など様々な市町村でこの計画が策定されています。この計画づくりを進めていく上で大事なことのひとつが住民の理解と参画です。そこでFAJ災害復興委員会では、この計画づくりにおけるファシリテーショ

ンの可能性を探るためにFAJ委員会内で勉強会を実施しました。

話題提供をしてくださったのは、事前復興まちづくり計画策定で実績がある(株)建設技術研究所の小倉さん、伊藤さん。実際の取り組みのケースから事前復興まちづくり計画の概要を学び、その後課題と可能性を探りました。なお、伊藤さんとは「熱海市伊豆山復

興まちづくり計画」づくりでご一緒させていただきました。

小倉さんが実践から感じていることとして、事前復興の話し合いにおける課題は、自治体職員や市民に関連して「職員や市民の理解が図られないと議論が進まない」「検討内容の意図や目的が伝わらないと実用な議論からずれてしまう」「安全確保とまちの持続性のバランスの両面を相互に検討する必要がある」とのこと。

委員からは、この課題3点については「ファシリテーションのポイントとして、情報共有の場づくりやプロセスの工夫」「場づくりの工夫と目的目標の再確認の働きかけ」「相反しているように見える課題を話し合う際の進め方の工夫」などが考えられるだろうとの意見が出されました。私たち一人一人が地域に住む市民として、そしてファシリテーターとしてどう災害や計画づくりに向き合うか改めて考える機会になりました。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

事前復興まちづくり計画検討のためのガイドライン【概要】2

国土交通省

1 事前復興まちづくり計画

(1) 想定する災害

(2) 計画としてとりまとめる内容

項目	想定する災害の想定
1. 復興まちづくりの目的	被災状況、被害の状況、復興等、復興の目標
2. 復興まちづくりの目標・実施方針	復興まちづくりの目標、基本的な考え方、復興まちづくりの方針
3. 目標の実現に向けた課題	目標を実現するための課題
4. 復興まちづくりの進め方の考え方	復興まちづくりの進め方の考え方

(3) 事前復興まちづくり計画策定の意義と効果

■事前復興まちづくり計画による効果（イメージ）

2 計画検討の進め方

(1) 検討の進め方

(2) とりまとめる方法

(3) 住民との関わり方

(4) 公表方法

国土交通省資料より <https://www.mlit.go.jp/toshi/content/001634543.pdf>

4. 事例紹介（和歌山県田辺市）

(3) 市民との検討、対話の実施

市民の代表者にも事前復興とは何かを考えてもらうことを目的に検討会議を実施。

検討会議委員メンバー（男性8名、女性10名）
分野：自治会・自主防災組織、社協、NPO、消防団、赤十字、JA、青年会議所、商工会議所、建設業協会、観光協会ほか

実施時期	実施内容
第1回 (R4, 10)	「事前復興計画」の目的、必要性について説明
第2回 (R4, 10)	復興基本方針と前提条件となる「安全水準」について説明
第3回 (R4, 12)	復興基本方針、復興まちづくりイメージに対するアイデア・意見を自由に書き出し
市北視察 (R4, 11)	東日本大震災被災地の復興状況を視察いただき理解を深める
第4回 (R5, 1)	被災者の立場となり被災後の生活・まちの姿をイメージする
第5回 (R5, 2)	第3回検討会議、第4回検討会議、事後に出された意見を計画に反映

4. 事例紹介（和歌山県田辺市）

(3) 市民との検討、対話の実施

復興まちづくりリーダーの立場となり、被災後のまちづくりの方針、考慮すべきことを話し合い、考えをとりまとめ。

上記2点のスライド画像は勉強会当日の小倉さんの資料より

東日本大震災、福島県沿岸部視察 ～自分たちにとっての災害・復興支援の原点を見つめ直す

原発事故が発生した当時、被災地では何が起きていたのか、被災された方々は何を思い、今まで生活をされてきたのか。当事者から話を聴くことで、話し合いで災害・復興支援を行う私たちは何を考える必要があるのかを探るために、福島県沿岸部を視察しました。

2023年10月22日、災害復興委員会では福島第一原子力発電所が立地する福島県大熊町と双葉町を視察しました。東日本大震災の際には地震と津波および原発事故の被害を受けた町です。原発事故の影響から、避難区域となり、12年が経過した今もなお、当時の震災の爪痕を色濃く残した町でもあります。私たち災害復興委員会は東日本大震災を機に設置された委員会ですが、震災当時の状態が残ったままの大熊町と双葉町を視察することで災害・復興支援の原点を見つめ直すこと、被災当事者からの生の声を聴くことで、「なぜ私たちは災害・復興支援に関わるのか」、災害・復興の意義を考えることを目的に視察を実施しました。

前日に10年以上支援を続けている南相馬市で同委員会の会議を行った翌日、午前中は大熊未来塾の木村さ

ん(※)のアテンドのもと、大熊町を視察しました。避難区域内に立ち入る際、放射線スクリーニング場でガイガーカウンター（放射線の被曝量を計測する機器）が手渡されます。12年経過した今でも、放射線が放出され続けていることを実感しました。避難区域内で最初に視察した場所は、木村さんのお子さんが通っていた小学校。教室は震災当時のままでした。ご家族を亡くされた木村さんのお話を聴き、改めて、震災の怖さ、なにげない日常や命の大切さを学びました。その後は、津波によって被害を受けた養殖場や除染土や瓦礫の仮置き場などを視察、さらに木村さんの実家とお子さんが見つかった場所を案内していただきました。原発事故によってご家族の捜索ができずに、本来であれば救えたかもしれない命のお話に胸が締め付けられました。

私たちがお手伝いする復興現場で



の話し合いには、支援上の課題や支援団体の連携課題等がありますが、そうした中でも被災された方々の思いや状況をいかに想像しながら、ファシリテーションをすることの大切さや難しさを改めて、認識しました。

2024年1月1日に発生した能登半島地震災害でも災害復興委員会として、話し合いによる支援を行っていますが、この視察を通じて学んだことを活かし、被災された方々のためにできることを考えていきたいと思います。（FAJ災害復興委員会、杉村郁雄）

※大熊未来塾 (<https://okuma-future.jp/>) 東日本大震災と津波、原発事故によって大熊町民が経験したことや学んだこと、大熊町の現状を発信している団体。

東日本大震災から12年。福島の“今”を知って—

2023年10月22日(日)大熊未来塾の木村紀夫さんアテンドによる視察ツアーに参加させていただきました。震災から12年が経過し、特に関西に生活のベースがある私は震災後の“今”の状況を目にすることもほぼ無くなりました。今回、余りに不勉強だったことを自覚したのですが、今なお多くの方がご自身の家に帰ることすらできない状況が続いているという現実を目の当たりにし、また視察の中で、原子力災害により立ち入りが制限されたことで津波の痕跡が残る建物や、震災が起きた瞬間そのままが保存されたかのような風景を見せていただき改めてショックを受けました。

今年発生した能登半島地震後の対応も日々ニュースで流れていますが、毎年のように大雨や地震などの災害が発生するこの国において、ファシリテーションを通じた支援活動は終わることなく続いています。私自身、これまでの各種災害に対して募金ぐらいしかできていないのですが、一人の市民としてかつFAJの会員として、もう一歩踏み込んで何かお役に立てるような活動をしなければと改めて思った次第です。

ご案内いただいた木村さん、そして企画いただいた災害復興委員会の皆様、ありがとうございました。

(FAJ会長、津田壮彦)

【令和6年能登半島地震】

2024年1月1日に発生した能登半島地震において、FAJ災害復興委員会ではこどもの居場所づくりに尽力されている方々の会議、七尾市における情報共有会議など支援を行っています。(2024年4月現在)

能登半島地震で被災したこどもの居場所づくり関係者連携会議 (オンライン支援)

2024年2月6日から始まった能登半島地震で被災したこどもの居場所づくり関係者連携会議は、こども家庭庁の相談を受けた委員である鈴木まり子が会議の立ち上げに関わりました。この会議は、「こども主体の復興を促進するために、こどもの居場所づくりに関係する者のネットワークを強化し、被災したこどもが居場所を持てることを実現する」ことを目的としています。主催は日本OECD共同研究です。全体進行役の鈴木に依頼を受けて、テクニカルサポート、グループファシリテーター、議事録などの役割をチームで対応しました。

会議は2月から3月の毎週火曜日17:30～18:30にオンラインで行わ

れ、こども家庭庁、文部科学省、石川県からの情報提供や現地でこどもの居場所づくりの活動している団体からの話題提供、質疑応答、情報交換、分科会、マッチングタイムなどが行われました。会議終了後には、放課後と呼ぶ時間を毎回設け、ブレイクアウトルームを選択できるスタイルにして、少人数で「テーマ」やいらした「人」によって新

たに対話の場をひらきました。

この会議は、地方の災害時にどうしても高齢者への支援に目が向きがちな現状の中で、今後を担うこどもたちや若者へのサポートについて、オンラインで情報交換や支援のマッチングにつながる貴重な場でした。

(FAJ災害復興委員会、浦山絵里)

【能登半島地震で被災したこどもの居場所づくり関係者連携会議】

- 第1回 1/23 (火) プレテストミーティング「SNSがある今、リアルに会うならこんな会議にしたい」
- 第2回 1/30 (火) 足立智昭様「大規模自然災害と子どもの心の問題の推移」(東日本大震災子ども・若者支援センター代表理事、宮城学院女子大学名誉教授)
- 第3回 2/6 (火) 今村久美様「緊急支援としてのこどもの居場所の役割と課題」(認定NPO法人カタルパ代表理事、災害時こども支援「sonaeru」事務局)
※第3回2/6 (火)は、分科会「特別支を要する児童・生徒支援と教員支援」を本休会議と並行。終了後に番外編「七尾地域の児童・生徒の居場所と学習支援」も実施。
- 第4回 2/13 (火) 仁志出憲聖様「避難先(主に金沢)の子供若者の居場所の課題と対応」(一般社団法人第3職員室理事、株式会社ガクトロボ代表取締役)
- 第5回 2/20 (火) 小浦詩様、小浦明生様「輪島市の子供若者の居場所の課題と対応」(NPO法人じつらあと理事長、ごちゃまるクリニック)(NPO法人じつらあと事務局長、「みんなのこども部屋」)
- 第6回 2/27 (火) 伊藤駿様「七尾市の子供若者の居場所の課題と対応」(NPO法人ROJE)
- 第7回 3/5 (火) 山田心健様「珠州市での取組と居場所支援事業(こどもひろば)の概要について」(公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 東京事務所)
- 第8回 3/12 (火) 木村聡様、能登高校の生徒、先生「能登町・能登高校での防災探究とこどもの居場所づくりの課題と対応について」(まちなか風船【能登高校魅力化プロジェクト】能登高校魅力化コーディネーター、みんなのこども部屋「わくわくぶらざ」運営)
- 第9回 3/19 (火) 大空幸星様、上原純枝様、小倉望未「オンラインによる子供若者の居場所の課題と対応」(特定非営利活動法人 あなたのいばしょ)
- 第10回 3/26 (火) リレートーク「被災したこどもや教員への支援のこれまでとこれから(来年度に向けて)」(これまでの登壇者と参加者で)

七尾市情報共有会議 「いやさか会議」

災害復興委員会では、2024年元日に発生した能登半島地震の被災地で2月末より七尾市情報共有会議を支援しています。

情報共有会議の目的は、七尾市において被災者を支援している行政・社会福祉協議会(災害ボランティアセンター運営)・NPO等の支援団体の方々が一同に会して、三者が連携することで被災者のニーズに対して「もれ・むら」のない支援を届けることです。隔週で開催されている情報共有会議には、毎回20名ほどの方々が集まり、オンラインでの参加者と繋いでハイブリッド形式で話し合いが行われています。

災害復興委員会は、会議の主催

者である能登復興ネットワーク(通称NRN)より依頼を受けて、会議の準備段階から、当日の会場での会議進行、およびオンラインでの記録まで支援しています。毎回の会議には委員会メンバーが2～3名七尾市の会場に入り、オンラインからのメンバー3～4名と連携しながら会議を運営しています。また、被災地に近いFAJ 富山サロンの

メンバーにも現地/オンラインでの支援にサポーターとして協力頂いています。

これから本格的な復興が始まる被災地において、FAJが持っている全国のリソースと様々な知見を活かして、中長期的に支援を継続していきたいと考えています。

(FAJ災害復興委員会、平山猛)



3月27日会議の現地での様子。



会場の様子はオンラインでも配信。

2023年度 活動一覧

※活動会員数 117人、受益者(会員) 22人、受益者(一般) 1,116人、総計 1,255人(いずれも延べ人数)

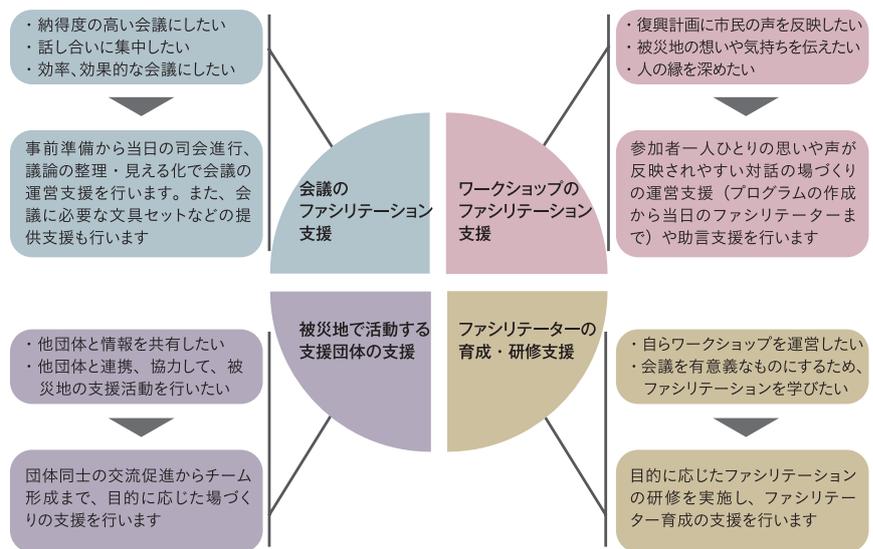
4月14日	南相馬市連携会議に向けてのMTG (福島県南相馬)	11月15日	JVOAD全国フォーラム/ケース会議(静岡県静岡市)
4月16日	いたばし総合ボランティアセンター災害ボランティア学習会(東京都板橋区)	11月22日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)
5月17日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	12月1日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)
5月24日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)	12月13日	JVOAD全国フォーラム分科会(東京都墨田区)
6月12日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	12月20日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)
7月12日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	1月10日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)
8月9日	秋田県域情報共有会議(秋田県秋田市)	2月6日	第3回能登半島地震で被災したこどもの居場所づくり関係者連携会議(オンライン)
8月21日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)	※以降、第10回まで計8回実施	
8月23日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	2月21日	防災復興トークカフェ(オンライン)
8月31日	秋田県域情報共有会議(秋田県秋田市)	2月28日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)
9月1日	災害復興に活かす「ファシリテーションと板書・見える化」プレ講座(オンライン)	2月28日	第2回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)
9月2日	富山サロン例会話題提供(富山県射水市)	3月1日	大分県社協災害VCリーダー研修(大分県大分市)
9月4日	災害復興に活かす「ファシリテーションと板書・見える化」プレ講座(オンライン)	3月1日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)
9月9日	災害復興に活かす「ファシリテーションと板書・見える化」講座(静岡県静岡市)	3月2日	和歌山サロン例会話題提供(和歌山県和歌山市)
9月13日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	3月13日	第3回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)
10月18日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)	3月13日	熱海市ささえ逢いセンター相談員連絡会(静岡県熱海市)
11月1日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議/立ち上げ訓練(福島県南相馬市)	3月16日	防災復興トークカフェ(オンライン)
		3月27日	第4回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)

日本ファシリテーション協会と災害復興委員会

ファシリテーション(Facilitation)——、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で参加と相互作用を促す進行役などがわかりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会(FAJ: Facilitators Association of Japan)は、ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し2003年に法人として設立、2004年には内閣府より特定非営利活動法人(NPO)の認証をうけました。2022年7月現在、1,146名の会員が活躍する団体となっています。

災害復興委員会は、2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害直後にFAJ内に設置され、以後、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を柱に各地で活動しています。



特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

災害復興委員会 2023年度 活動報告書

2024年6月1日発行

編集 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 災害復興委員会

浅羽雄介、浦山絵里、遠藤智栄、遠藤紀子、杉村郁雄、鈴木まり子、疋田恵子、平山猛、山田真司

発行 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号 www.faj.or.jp

お問い合わせ(Eメール) fukkou311@faj.or.jp